

## 『源氏物語』にみる法皇朱雀院の五十賀

— 権威と迷妄 —

植 田 恭 代

### はじめに

源氏物語第二部が始動する若菜上下巻において、賀宴がしばしば描かれる。若菜上巻には、玉鬘をはじめ紫上や秋好中宮、帝の命を受けた夕霧と、身近な人々によつて催される光源氏四十の賀があり、若菜下巻には朱雀院五十賀がある。これらの晴れやかな場面は、賀宴の盛儀を表すものの、巻頭から暗さの漂う第二部の物語展開とその文脈においては、女三宮降嫁を契機とする六条院体制の崩壊に奉仕するものとして位置づけられ、朱雀院の五十賀についても同様にみなされがちである。五十賀は、若菜下巻においてしばしばみられる月日の記述によつて、延引されることばかりが強調されていく。確かに、この算賀が予定を逸脱し続ける異例の儀礼として描かれていることは否めない。しかし、物語におけるこの五十賀を、それだけに収束さ

せてしまつてよいものなのだろうか。

そもそも、研究史においては、朱雀院その人に否定的な評価を与えてきた経緯があつた。

早く、朱雀院は負け馬であり、女三宮の降嫁の判断は錯誤であつたという見方が出され、それはその後の人物論においてもひとつの見方として踏襲されてきた。もつともこうした根強い見方は、かえつて朱雀院を肯定的にとらえ直す見方をも導くことになる。朱雀院の出家はその弱さを克服して本意を貫く皇統の人物となるとみる立場や、桐壺聖代の理想性を標榜し光源氏と共感しあつていくという指摘も、そうした流れのうえにあるとみなすことができよう。近年でも、准拠の観点からその出家を見直し、宇多上皇のあり方に繋がるうとする朱雀院をみる見解などが出されている。近年の人物論の側からの評価としては、朱雀院を肯定的に見直す論が出される傾向が強いものの、朱雀

院の五十賀については、いまだ六条院崩壊に奉仕する悲哀に満ちた儀礼という印象で覆われているのではないだろうか。

しかし、少なくとも儀礼が行われ、その試楽の描写がみられるという物語内事実を、どのように考えたらいいのか、まだ検討の余地はあろう。本稿では、朱雀院の五十賀について、一度見直しを試みるものである。

### 一、延引される五十賀

若菜下巻では、朱雀院のために五十賀が企画される。この五十賀は、もとをただせば、朱雀院の女三宮に對面したいという願いを受けてのものであった。

朱雀院の、今はむげに世近くなりぬる心地しても心の細きを、さらにこの世のことかへりみじと思ひ棄つれど、對面なんいま一たびあらまほしきを、もし恨み残りもこそすれ、ことごとしきさまならで渡りたまふべく聞こえたまひければ……略……

若菜下巻 一七九頁

残り少ない命の予感を述べつつ、この世に恨みを残さないためにとの理由で、女三宮が来ることを望む。その意向を知った光源氏は、そう簡単に参上でできる立場でもないことを思いめぐらし、朱雀院の五十賀を企画するのである。しかし、当初の予定どおりには運ばないのもこの賀宴の特徴である。まず、それから確認しておきたい。

院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふことどもいとちたきに、さしあひては便なく思されて、すこしほど過<sup>こ</sup>したまふ。二月十余日と定めたまひて、楽人、舞人など参りつつ、御遊び絶えず。

若菜下 一八三頁

さまざまの御つつしみ限りなけれど、駿も見えず。重しと見れど、おのづからおこたるけぢめあるは頼もしきを、いみじく心細く悲しと見たてまつりたまふに、他事思されねば、御賀の響きもしづまりぬ。

若菜下 二二三頁

本来一月に予定された御賀は帝の催すさまざまな儀と重なることを避けて、二月十四日に予定されたが、紫上発病によつて、ふたたび日取りは白紙に戻される。

かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、八月は、大将の御忌月にて、楽所のこと行ひたまはむに便なかるべし、九月は、院の太后の隠れたまひにし月なれば、十月にと思しまうるを、姫宮いたくなやみたまへば、また延びぬ。

若菜下 二六六頁

参りたまはむことは、この月かくて過ぎぬ。二の宮の御勢ひことにて参りたまひけるを、古めかしき御身さまにて、立ち並び顔ならむも憚りある心地しけり。「十一月はみづからの忌月なり。年の終はり、はた、いどもの騒がし。ま

た、いとどこの御姿も見苦しく、待ち見たまはむをと思ひはべれど、さりとてさのみ延ぶべきことにやは。むつかしくもの思し乱れず、あきらかにもてなしたまひて、このいたく面瘦せたまへるつくるひたまへ」など、いとらうたしと、さすがに見たてまつりたまふ。

若菜下 二七一頁

十二月になりけり。十余日と定めて、舞ども馴らし、殿の内ゆすりてののしる。二条院の上は、まだ渡りたまはざりけるを、この試楽によりぞ、えしづめはてで渡りたまへる。

若菜下 二七三頁

御賀は、二十五日になりけり。

若菜下 二八四頁

秋に再度予定された御賀は、八月は夕霧の母葵上の、九月は朱雀院の母弘徽殿大后の忌月であり、十月は懐妊している女三宮の具合が思わしくなく、十一月は光源氏と朱雀院の父桐壺院の忌月と、この年の後半も、結局はさまざまな事情が畳みかけるように次々と明かされ、先送りとなり続けるのである。ついに十二月十余日となったものの、なぜか結局催されたのは、年も押し詰まった二十五日なのであった。

これだけ延びに延ばされることは、異例の事態であり、畳みかけるような月日の表現によって、不穏な雰囲気や物語は覆われていく。しかし、これらはいずれも六条院側からの事情であ

り、光源氏が十一月の忌月を述べる会話の直前には、女二宮がすでに盛大な御賀に参上していることに配慮して、身重の女三宮が競い合うのも憚られるという心情が説明されている。朱雀院の側にある支障としては、せいぜい光源氏と共通の父の忌み月くらいである。六条院の不都合は、必ずしも朱雀院の立場を傷つけることばかりではあるまい。さらに、十二月十日過ぎに御賀が定められてからは、むしろ六条院はその華やきに包まれて浮き立った様子であり、試楽は二条院へ下がったままであった紫上をも、久々に六条院に呼び寄せる。続く部分では、明石女御が出産のためともと里下がりにしていたが、ここに至ってまた男子を出産したことが知られ、次々と恵まれる孫に光源氏も満足している様子も描かれている。御賀は、六条院から長らく失せていた邸内の活気を導いているのである。御賀じたいが不穏というわけではなからう。光源氏をとりまく六条院の諸事情が、物語の暗さを醸し出しているとみるべきなのではないか。

若菜上巻冒頭では、余命幾ばくもない上皇のように見受けられた朱雀院は、逆に考えれば、これだけ延引される時間を生き延びているわけであり、病篤い人物という印象はむしろ希薄になつてゐる。若菜下巻後半では、出家した上皇として据え置かれ、ここに至って初めて登場する「山の帝」も、その立場の変わった上皇すなわち元の帝を表す呼称であり、「山の帝の御賀」という一続きの表現で「御賀」にかかつていく。つまり、朱雀院の五十賀は、法皇の五十賀とみなされているのである。

## 二、朱雀法皇

四代の帝の治世が描かれる『源氏物語』にあって、出家する帝は、その二代目の座に着く朱雀院だけである。遷標巻で讓位した後、上皇として生き続け、若菜上巻の開始からまもなく、出家を遂げる。桐壺帝も冷泉帝も讓位はするものの出家したという記述はみえず、また紅葉賀巻でその存在のみが語られる先帝に至っては具体的な描写もなく、もとより出家しているかどうかなどの詳細な情報も不明である。こうしてみると、上皇の出家という設定じたいが、物語における朱雀院を支えている重要な造型として浮かび上がってくる。ここで、しばらく、法皇としての朱雀院について、確認しておくことにしたい。

朱雀院は前々から道心を抱いており、若菜上巻冒頭でも、「年頃行ひの本意深きを」とみずから述べていたが、ここに至ってようやく出家を断行する。物語において朱雀院の存在感が増すのはこの若菜上巻が始まってからでもあり、それは朱雀法皇としての姿に他ならない。

まず、朱雀院の出家場面を確認しておきたい。若菜上巻冒頭から延々と描かれる女三宮の結婚問題で、光源氏が降嫁先の候補として浮上するなか、年末に行われた女三宮の裳着に続くのが、朱雀院の出家である。

御心地いと苦しきを念じつつ、思し起こして、この御いそぎはてぬれば、三日過ぐして、つひに御髪おろしたまふ。

よろしきほどの人の上にてだに、今はとてさま変るは悲しげなるわざなれば、ましていとあはれげに御方々も思しまどふ。尚侍の君は、つとさぶらひたまひて、いみじく思し入りたるを、こしらへかねたまひて、「子を思ふ道は限りありけり。かく思ひしみたまへる別れのたへがたくもあるかな」とて、御心乱れぬべけれど、あながちに御脇息にかかりたまひて、山の座主よりはじめて、御戒の阿闍梨三人さぶらひて、法服など奉るほど、この世を別れたまふ御作法いみじく悲し。今日は、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、これらの男女、上下ゆすり満ちて泣きとよむにいと心あわたたしう、かからで静やかなる所にやがて籠るべく思ししまうける本意違ひて思しめさるるも、ただこの幼き宮にひかされてと思しのたまはず。内裏よりはじめたてまつりて、御とぶらひの繁さいとさらなり。

若菜上 四四頁<sup>7)</sup>

朱雀院にびたりと寄り添い深い悲しみにくれている臘月夜に、朱雀院は、子を思う親の心もさることながら、それ以上にあなたとの別れが堪えがたい、と言つて受戒直前のこの期に及んで心を乱す。朱雀院の出家は、およそ俗世を断ち切るものではなく、心を寄せる人への未練の深さを際立たせるのである。立ち会う僧をはじめ、女宮たちから身分の下がる男女に至るまで泣きとよむ様子に「心あわたたしう」と動揺し、本意に反するよ

うに思われるのも女三宮にひかされてであると思ひ、そのように言う。朱雀院の出家の場面は決して念願叶つての悟り澄ました行為の描写などではなく、朧月夜への愛執や悲嘆する人々に取り囲まれての動揺、そして女三宮が絆しであることの再確認に、他ならないのであつた。朱雀院は出家しながら、俗世と離れできない法皇である。

では、出家してからの朱雀院の人生は、どうであつたのか。若菜上巻冒頭にみる出家の直接の動機は、「もとよりあつしくおはします中に、このたびはもの心細く思しめされて」とあるとおり、病身がさらに余命幾ばくもなく思われたから、と解釈できよう。しかし、朱雀院は、出家後すぐに世を去つたわけではなく、物語世界では夕霧巻まで登場し、その死が知られるのはようやく宿木巻に至つてからなのである。

故朱雀院の、とりわきて、この尼宮の御事をば聞こえおかせたまひしかば、かく世を背きたまへれど、衰へず、何ごとももとのままにて、奏せさせたまふことなどは、かならず聞こしめし入れ、御用意深かりけり。

宿木 四七七頁

ここで初めて、「故朱雀院」の呼称がみえ、すでに故人であることが確認される。いつまで生きたのか、その生涯の閉じ方は物語には描かれない。第二部で最後に登場するのは夕霧巻である。光源氏と同じくらいまで生きたのか、それ以上なのか。第二部から第三部への橋渡しをする匂宮・紅梅・竹河の三帖で、

登場人物たちの整理がなされていることを考慮すれば、そのあたりで朱雀院も人生を終えていたとも考え得るが、物語の叙述にはみられない。若菜上巻で年明けて四十歳であつた光源氏は、間もなく出家をしそうな予感を抱かせながら晩年最後の姿を見せる幻巻で五十二歳かと推定されており、同じくらい生きていそうな印象は与えていよう。少なくとも、出家後、十年強は生きていたのではないかと思われる。いずれにしても、病篤く差し迫つて出家をした後も、かなり長く存命していたことはほぼ間違いない。朱雀院の法皇として生きた時間は決して短いものではなく、新年立てに従つて濡標巻の冷泉帝即位を光源氏二十九歳と考えるなら幻巻までは三十三年になり、上皇になつてからの時間の約三分の一は法皇であつたことになる。

法皇の住まいは、女三宮が光源氏に降嫁したあと、朱雀院から移つた御寺である。

院の帝は、月の中に御寺に移ろひたまひぬ。この院に、あはれなる御消息ども聞こえたまふ。姫宮の御事はさらなり、わづらはしく、いかに聞くところやなど、憚りたまふことなくて、ともかくも、ただ御心にかけてもてなしたまふべくぞ、たびたび聞こえたまひける。されど、あはれにうしろめたく、幼くおはするを思ひきこえたまひけり。

若菜上 七五頁

若菜上巻の始めに「西山なる御寺造りはてて、移ろはせたまはんほどの御いそぎをせさせたまふにそへて」とあつたことが

ら、これは「西山の御寺」であり、『河海抄』をはじめ古注釈では、宇多天皇が出家し法皇として暮らした仁和寺とみなされてきた寺である。女三宮の六条院降嫁は二月であるから、二月のうちには西山の御寺に移っており、その後、この西山の寺に籠もつて、長く生き続けたのが朱雀院なのである。法皇としての朱雀院の存在感は、きわめて強い。

出家後の朱雀院のあり方も仏道一筋ではない。朱雀院は法皇となつてからも、女三宮への心配から、たびたび光源氏に手紙を送り、愛娘の身を案じ、また朧月夜に対しても依然深い思いを抱いている。

今はとて女御、更衣たちなど、おのがじし別れたまふも、あはれなることなむ多かりける。尚侍の君は、故後の宮のおはしし申し二条宮にぞ住みたまふ。姫宮の御事をおきては、この御事をなむ、かへりみがちに帝も思したりける。尼になりなむと思したれど、かかる競ひには、慕ふやうに心あわたたしと諫めたまひて、やうやう仏の御事などいそがせたまふ。

若菜上 七六頁

女三宮と朧月夜への執心はなみひとつりではなく、朧月夜の出家の意向を後追いのようによく言つて制する。出家者でありながら、出家を諫める側にまわるのである。後に、夕霧巻で、女二宮である落葉宮が出家を望んだ時も、朱雀院はそれを制す。

宮は、かくて住みはてなんと思したつことありけれど、院に人の漏らし奏しければ、「いとあるまじきことなり。げに、あまたとぞまかうさまに身をもてなしたまふべきことにもあらねど、後ろ見なき人なむ、なかなかさざるさまにてあるまじき名を立ち、罪得がましき時、この世後の世、中空にもどかしき咎負ふわざなる。ここに書く世を棄てたるに、三の宮の同じごと身をやつしたまへる、末なきやうに人の思ひ言ふも、棄てたる身に思ひ悩むべきにはあらねど、かならずさしも、やうのこととあらそひたまはむもうたてあるべし。世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり。心と思ひとる方ありて、いますこし思ひしづめ心澄ましてこそともかうも」とたびたび聞こえたまうけり。

夕霧 四五九頁

朱雀院は我が身を「棄てたる身」と表現し、その立場で関知することではないと断りながらも、落葉宮の出家を思いとどまらせるよう、たびたび制している。その理由としてあげられているのは、後見のないまま出家しても何も望めないこと、自身と女三宮に加え落葉宮まで出家をしたならば、行く末みじめな一族のように世間が取り沙汰すること、である。出家の身でありながら、出家を救済とみなしていかないかのような言動ともいえる。娘への妄執から逃れられない朱雀院の造型は、以後の物語を通じて一貫するものである。

山の帝は、二の宮もかく人笑はれなるやうにてながめたま

ふなり、入道の宮もこの世の人めかしき方はかけ離れたまひぬれば、さまざまに飽かず思さるれど、すべてこの世を思し悩まじと忍びたまふ。御行ひのほどにも、同じ道こそは勤めたまふらめなど思しやりて、かかるとなになりたまたて後は、はかなきことにつけても絶えず聞こえたまふ。

横笛 三四六頁

「山の帝」と呼ばれる朱雀院は、女三宮に山でとれた筍や野老などを贈り、「すべてこの世を思し悩まじと忍びたまふ」とありながら、一方で「絶えず聞こえたまふ」とあるように、ほんの些細なことでも頻繁に手紙を贈っている。鈴虫巻の持仏開眼供養の折の布施はもとより、一条御息所の亡くなった時には落葉宮に手紙も贈る。法皇としての朱雀院の人生は、常に娘にかかわり続け、その中心にあるのが女三宮であった。

朱雀院の物語独自の行動を描く場面の基調として響かせられるのが、有名な藤原兼輔の歌である。

太政大臣の、左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日、中将にまかりて、ことをはりてこれかれまかりあかれけに、やむごとなき人に三人ばかりとどめて、まらうどあるじさけあまたたびのち、ゑひにのりてこどもうへなど申しけるついでに

兼輔朝臣

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

『後撰集』卷十五 雑一・一一〇一

『大和物語』四十五段でも知られる、子を思う親の情を詠む歌は、引歌として物語に二十六例あり、そのうち五例が朱雀院に關わることが指摘されている。いま、それを再検証するために、朱雀院に關する例をあげてみる。

①今、はた、またなく親しかるべき仲となり睦びかはしたまへるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚かなるに添へて、子の道の闇にたちまじり、かたくななるさまにやとて、なかなか他のことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。

若菜上 二二頁

②子を思ふ道は限りありけり。

若菜上 四四頁

③闇をはるけで聞こゆるも、をこがましくや……略……

若菜上 七五頁

④なほこの道は離れがたくて、宮に御文こまやかにてありけるを……略……

朱雀院↓女三宮 若菜下 二六七頁

⑤世の中をかへり見すまじう思ひはべりしかど、なほ、まどひさめがたきものはこの道の闇になむはべりければ……

朱雀院↓女三宮 柏木 三〇四頁

物語には多くの親子關係があるが、この引歌が用いられるのは、多岐にわたるわけではない。母君から故桐壺更衣へ、明石御方から姫君へ、左大臣から故葵上への場合などの深い親子の情、不義の子への藤壺や光源氏の思いに加え、便宜的に用いる場合

もあり、須磨巻の光源氏から夕霧のように、女性たちの方に執心していることを語り手が諧謔的に表す場合もある。こうしたなかで、若菜上下巻と柏木巻の用例は多く、③は臘月夜への愛執を強調するための用法であるが、他は朱雀院から女三宮への孟執をあらわしている。「闇」とあるのは二十二例、そのうち「心の闇」は十一例にみられ、よく引かれることばであるが、朱雀院から女三宮への用例には「闇」は一例あるものの、単に「心の闇」という例はない。かわりに、①⑤は「子(こ)の道の闇」、④は「この道」、②も「子を思ふ道」であり、④⑤の「こ」は子と掛詞になり、子ゆえの闇であることを強調する例が多い。朱雀院以外で子の意を明確にして引くのは、夕霧の会話中にある父大臣から故柏木への情と、宇治の八宮の例のほか、賢木巻と前述の須磨巻の光源氏の例があるだけである。法皇である朱雀院に、子どもを明確に示す例が多いのは注目されよう。さらに、闇に「まどふ」「くれる」などの表現が多いなかで、④には「離れがたくて」と続き、⑤の前には「まどひさめがたきものは」があり、「がたし」という表現がみられ、まさに妄執を示す表現として用いられているのである。

出家者が子ゆえの闇に惑う例として、『多武峰少将物語』『栄花物語』『月の宴』の高光や『大和物語』一六八段の良宗宗貞もあり、出家者が子に執心するのは特別なこととは言いがたい。しかし、法皇という座にありながら、娘を絆しとする朱雀院のあり方は別格であったに違いなく、だからこそ、その造型を支

えるように、兼輔の歌を、子ゆえの闇に一段と引き寄せて物語に機能させていると考えられる。

### 三、法皇の算賀

では、このような法皇としての朱雀院に、算賀が行われているという物語の事実を、どのように考えてみるができるであろうか。闇に惑う造型と合致するとみなせるのかどうかについて、考えてみなくてはなるまい。

物語における算賀としては、前述の光源氏の四十賀と先の帝の算賀ではないかと推定される紅葉賀の朱雀院行幸と当該場面のみであり、物語内の場面としては、決して多くはない。五十賀として明記されるのは、この朱雀院の一例のみである。光源氏の五十賀は物語に描かれない。さらに、朱雀院の四十賀も描かれてはいない。算賀が催されるというのは、延引されたにせよ、基本的に被賀者を寿ぐ役割は担うはずであり、その描写もやはりまず祝賀の意味合いを持つことは否めない。さらに、五十賀の本番は、若菜下巻巻末に端的な情報として提供されるにとどまるものの、かわりに、試案というかたちで描写はなされている。朱雀院の五十賀は、物語の稀少な算賀の描写と言わざるを得ない。

そもそも、法皇の算賀というのは平安の社会でどのくらい行われていたのであろうか。長寿を祝い祈念する算賀は、すでに平安以前から行われており、歴史の側からその一覧も作成され



ている<sup>(13)</sup>。それによれば、平安朝ではさまざまな算賀が行われているが、上皇の算賀としては、天長二（八二五）年十一月二十八日に淳和天皇が内裏において主催した嵯峨上皇四十賀、延喜六（九〇六）年十月二十三日に温子が諸事に諷誦をさせ、二十六日に醍醐天皇が仁和寺において、十一月七日には朱雀院において主催した宇多上皇四十賀、延喜十六（九一六）年三月には七日に朱雀院において醍醐天皇が主催し、同年十二月二十一日には敦慶親王が仁和寺で法会を設けた宇多上皇五十賀、延長四（九二二）年九月二十八日に藤原斐子が亭子院にて主催した宇多上皇六十賀がある。さらに下って、承平七（九三七）年十二月十七日に冷泉院において元良親王等が主催した陽成上皇の七十賀がみられる。その後、算賀じたいは続くものの、上皇の例となると康和四（一一〇二）年の堀河天皇が主催した白河上皇五十賀までみられず、院政期に白河上皇六十賀や鳥羽上皇五十賀、後白河上皇五十賀などがしばしば行われるまでの間、平安中期は上皇の算賀の空白期間とも言えよう。平安中期以前に上皇の算賀が催された例となると、嵯峨、宇多、陽成の三上皇のみであることには注目される。さらに、嵯峨上皇は出家せず、陽成上皇の出家は天曆三（九九九）であり算賀の時点ではまだ出家しておらず、一方、宇多上皇は昌泰二（八九九）年に出家しており、四十賀、五十賀、六十賀のいずれも法皇としての算賀であった。もちろん陽成上皇は九月二十日に病のため出家し同月二十九日には崩御しており、上皇の出家の時期や寿命の間

題もあろうが<sup>(14)</sup>、それにしても、平安の初期から中期にかけての法皇の算賀としては、宇多法皇の場合のみである。それが四十賀から三回も重ねて催されていることから、宇多法皇の算賀はきわめて印象の強いものであったに違いない。宇多法皇の五十賀は、初めて試案が行われていた例ではないかと推定されている<sup>(15)</sup>。宇多法皇の法皇としてのあり方は、のちの院政の先駆けのような一面を持っていたのではないだろうか。もちろん、道真を登用できなかったことでも明らかのように、大きな力はふり得ず、院政期とは同一視できないのだが、歴史上の法皇のなかにおける位置を溯つてとらえ返してみれば、後の法皇の力を導き出すような位置にある法皇とみなせよう。准拠の観点から、朱雀院に実在の朱雀天皇を重ねてみる立場があり、近年は前述のとおり第二部の朱雀院を宇多上皇に重ねる見方も出されてお<sup>(16)</sup>り、また前節でみたように出家後も俗世と関わる宇多法皇の姿にも重なる部分があるのだが、算賀そのものが稀であることからすれば、法皇の算賀という面からも宇多法皇のイメージは強まってくる。こうして考えてみれば、法皇の算賀というのも、権威の表象という意味合いが濃厚であったのではないだろうか。一条朝という時代で考えるならば、法皇といえは、まず花山法皇となろうが、『栄花物語』「みはてぬゆめ」に、中務とその娘を同時に懐妊させたという異常な行為の一端が伝えられているように、常軌を逸した法皇である。そうした身近な法皇ではなく、溯る法皇のイメージを求めているところに、物

語の權威を重んじる姿勢をうかがうことができるのではないか。

『西宮記』によれば、宇多上皇は自身の四十賀の間違いを指摘しており、それは俗世の權威へのこだわりを示しているとも考えられる。院政期には遠く及ばないにしても、そうした価値観とは無縁ではありえない、權威的な存在であつたからなのである。法皇の算賀が催されるということは、威光が尊重されることの証明でもある。院政期に法皇の算賀が復活してくるのは、それを何より如実に語っているのではないだろうか。

人生儀礼とは、個人を社会に位置づけ、その結びつきを確認するものである。社会と無縁に生きるのであれば、そのような晴れの儀式を行う必要はない。算賀もその例外ではなく、事実、主催者にはふさわしい人があたり、専門歌人たちによる賀の屏風歌も献上される。法皇の場合であつても、その意味は同様であろう。法皇という立場じたい、社会と切り離されるのではないことを、これらの史実の算賀は示しているのではないか。宇多法皇に三回の算賀があるのは、それだけ、宇多法皇じしんが仏道一途ではありえぬ存在であることを示していよう。史実をたどる限り、法皇の算賀は、有力な法皇のために催された晴れの儀礼としての性格が強く、宇多法皇という存在とも切り離しがたい儀礼と考えられるのである。

#### 四、五十賀と童舞

今度は、物語の五十賀の描写に即して検討してみる。

物語にたち戻れば、光源氏は法皇が俗人とは違うため配慮はするものの、同時に、朱雀院の好みに合わせて、主催者光源氏のこの世での総力をあげて準備している。そして、そこで重要な配慮として描かれるのは、舞であつた。

いにしへも、遊びの方に御心とどめさせたまへりしかば、舞人、楽人などを心ことに定め、すぐれたるかぎりをととのへさせたまふ。右の大殿の御子ども二人、大将の御子、典侍腹の加へて三人、まだ小さき七つより上のは、みな殿上せさせたまふ。兵部卿宮の童孫王、すべてさるべき宮たちの御子ども、家の子の君たち、みな選び出でたまふ。殿上の君たちも、容貌よく、同じき舞の姿も心ことなるべきを定めて、あまたの舞の設けをせさせたまふ。いみじかるべきたびのこととて、皆人心を尽くしたまひてなん。道々の物の師、上手暇なきころなり。

若菜下 一八〇頁

右の大殿は右大臣の髭黒で、その子が二人と、大将すなわち夕霧の子は典侍腹を加えて三人、螢兵部卿宮の子をはじめ、しかるべき宮家や家の子どもたちが選ばれ、その練習に励むのである。九世紀後半から盛んになる参賀で童舞が不可欠の演目となることが指摘されており、『小右記』『日本紀略』『教訓抄』な

どの諸記録や、『栄花物語』「とりべ野」『大鏡』で有名な長保三（一〇〇一）年九月十四日の東三条院における詮子四十賀の折に、試楽で倫子腹の嫡男頼道が御衣を賜りながら、明子腹頼宗の方が厚遇されたことに道長が立腹した話もある。童舞が重視されていたことは揺るぎない事実であり、史実における法皇の五十賀の場合にも、それをみてとることができる。

七日辛酉。辰時。天皇幸<sub>二</sub>朱雀院。奏<sub>レ</sub>賀<sub>二</sub>太上法皇五十筭<sub>一</sub>。

諸司献<sub>レ</sub>物。童親王。及五位以上子為<sub>二</sub>舞<sub>一</sub>人。

『日本紀略』延喜十六年三月七日条

朱雀院で宇多法皇の五十賀が行われ、舞童として童親王や五位以上の子どもたちが定められている。この直前の三月三日条には「太上法皇可有<sub>二</sub>五十御賀<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>左近衛府序<sub>一</sub>試同<sub>二</sub>賀童等<sub>一</sub>」とあり、左近衛府で御賀の童などを試したことがみえ、また三月五日条には「又御仁寿殿。贈太政大臣藤原公第三男奏<sub>二</sub>散手舞<sub>一</sub>」とあり、御賀のためなのか、仁寿殿で時平の三男敦忠が散手を舞っている。また『新儀式』「天皇奏<sub>二</sub>賀上皇御筭<sub>一</sub>事」のなかで、「前二年」の準備として行事の人を定めることに続いて、「前二箇月。定<sub>レ</sub>調楽所行事人。并可<sub>レ</sub>献<sub>二</sub>舞童<sub>一</sub>人々上」とあるのをはじめ、しばしば「舞童」がみえ、上皇と天皇の着座の後に「次第奏<sub>二</sub>舞<sub>一</sub>。此間有<sub>二</sub>上皇命<sub>一</sub>。召<sub>二</sub>第一親王<sub>一</sub>。舞童親王有<sub>二</sub>勅<sub>一</sub>」とも記される。『新儀式』のこの記述には、たびたび延喜六年の例が記され、『扶桑略記』延喜六年十一月七日条に、宇多法皇四十賀において「有<sub>二</sub>侍臣等舞<sub>一</sub>」とあることを引き合わせて、宇

多法皇四十賀においても童舞が行われたのではないかと推測されてもいる<sup>(20)</sup>。おそらくそう解釈せざるを得ないのではないか。そうであるならば、なおさら、上皇の算賀において舞童が重視されていたことは明らかである。算賀は、将来の期待を担う童親王や有力貴族の子弟たちが、その技量を競い披露することを通して、揺るぎない評価を得る場でもある。宇多法皇は、出家の身でありながら仏道のみ生きるのではなく、ここでは、むしろ元最高権力者としての威光を示す存在とみるべきであろう。

ひるがえって物語を考えれば、出家を遂げた朱雀院の五十賀は、光源氏の側からは、その在俗時の趣向が顧みられて「遊び」が持ち出され、舞楽に焦点が定められている。選りすぐりの舞童たちの舞は、算賀当日にはみられないものの、試楽の場では、明らかに描写の中心である。

右の大殿の四郎君、大将殿の三郎君、兵部卿宮の孫王の君たち二人は万歳楽、まだいと小さきほどにて、いとらうたげなり。四人ながらいづれとなく、高き家の子にて、容貌をかしげにかしづき出でたる、思ひなしもやむごとなし。

また、大将の御典侍腹の二郎君、式部卿の宮の兵衛督といひし、今は源中納言の御子皇慶、右の大殿の三郎君陵王、大将殿の太郎落躰、さては太平楽喜春楽などいふ舞どもをなむ、同じ御仲らひの君たち、大人など舞ひける。暮れゆけば、御簾上げさせたまひて、ものの興まさるに、いとう

つくしき御孫の君たちの容貌姿にて、舞のさまも世に見えぬ手を尽くして、御師どもも、おのおの手の限りを教えきこえけるに、深きかどかどしさを加へてめづらかに舞ひたまふを、いづれをもいとらうたしと思す。老いたまへる上達部たちは、みな涙落としたまふ。式部卿宮も、御孫を思して、御鼻の色づくまでしほたれたまふ。

若菜下 二七九頁

先に引用した部分に登場した子どもたちそれぞれの舞が、具体的な曲名の叙述とともに描かれている。物語においても、童舞が父や祖父の権威を表し、また頭中将家の子どもは登場せず髭黒の子どもたちが孫であるかのように登場することから、ここに冷泉退位後の情勢が反映しているという見方もあり、<sup>(2)</sup>それぞれの子どもたちの系譜を考慮してみれば、五十賀の童舞が権威や政治力と密接に連動しているのは、認めざるを得まい。この試楽の場面で、螢兵部卿宮や夕霧の子どもたちにもまじって光源氏の血をひいてはいない髭黒の三郎君・四郎君まで「御孫の君たち」と呼ばれているのは、光源氏の孫やその同世代の子どもというくらいの意味にならう。髭黒の子どもたちがそう呼ばれるには、母玉鬘がかつて光源氏の養女格として六条院に入ったという事情もあろうか。しかし、試楽で絶讃される子どもたちを、光源氏側からだけではなく、算賀の主役である朱雀院側からもながめてみるべきであらう。舞童たちは、当然、被賀者である朱雀院の威厳にも奉仕していくはずである。若菜上巻で初

めて五十賀を思いつく場面でも、試楽当日の場面においても、いずれも「右の大殿」すなわち髭黒の子どもたちから描かれていく。舞童の描写は、光源氏側からの権威を表すとともに朱雀院の権威も表すはずであり、朱雀院にほどよい年齢の孫がいないとすれば、やはり身近なところにあるその世代の子どもを登場させる必要がある。髭黒は光源氏側からすれば玉鬘の婿であるが、朱雀院からみれば、今上帝の母である承香殿女御の兄であり、舞童は朱雀院の子である今上の従兄弟筋にもあたり、より朱雀院に近い有力者の子どもたちとなる。したがって、紹介される順序においても筆頭にあげられているのではないか。ここに真木柱と同腹の太郎二郎がみえないのは、むろん彼らがすでに童の年齢を過ぎていくからである。

若菜上巻の光源氏四十賀と比べても、ここでの舞童たちの描写は印象的である。玉鬘の奉った正月二十三日の光源氏の四十賀では、同じ音楽や舞楽に関する描写でも、琴の琴による演奏や唱歌、催馬楽「青柳」などが描かれ、舞はみられない。神無月に紫上が嵯峨の御堂で催す薬師仏供養は、夕霧と柏木の舞い姿に紅葉賀巻の青海波が想起される場面であるが、ここでは「万歳楽」「皇聲」「落躑」が舞われている。また、秋好中宮の命により夕霧が六条院丑寅の町で催す御賀での舞については、「例の万歳楽・賀皇恩などといふ舞けしきはかり舞ひて」とあるばかりで、いつもどおりという情報が提供されるにすぎず、

光源氏の琴や太政大臣の和琴の方が描写の中心であるといつてよい。かつて「遊びの方」に造詣が深かったのであれば、朱雀院の五十賀の試楽も、管絃や歌謡などにも描写が及んで当然であり、実際に楽人たちもおり、夕霧はその監督にあたつてゐるはずである。しかし、試楽では管絃の演奏はもっぱら女楽に委ねられ、謡いものは描かれず、童舞ばかりが強調される。

光源氏が柏木に向かつて言うことはのなかに「かの大将ともろともに見入れて、舞の童の用意、心ばへよく加えたまへ。物の師などいふものは、ただわが立てたることこそあれ、いと口惜しきものなり」とあり、是非あなたにという切り出し方で、童舞への教示を頼んでゐる。試楽当日の描写は、舞童を描くためにあつたとさえ、考えられるのである。「万歳楽」「皇馨」「陵王」「落躰」「太平楽」「喜春楽」の曲名がみえ、「など」とあるところから、まだ他にも舞われた曲はあつたことを想像させる。薬師仏供養にはなかつた「陵王」は「落躰」と番舞になることもあつた曲で、「太平楽」「喜春楽」も晴れの場に舞われる曲としては不自然ではなく、御堂の薬師仏供養の時とは場も違い、舞われる曲もふえて華やかさを増した御賀が描かれてゐる。いづれも賞讃に価し、舞の師に教えられて習得した技のみならず、そこに本来備わつてゐる才能、つまり「深きかどかどしさ」が加わり、みな大成をおさめる。老上達部や式部卿宮の感激の涙にくれる姿が、それを揺るぎないものとして物語に刻む。次代を担う有力貴族の家の子どもたちの舞は、光源氏ばかりでは

なく、算賀の主役である朱雀法皇が、現世の期待される将来とも確実に繋がることを意味していよう。上皇であつた法皇朱雀院の威厳を尊重するように、童舞は描かれてゐるのである。

こうした五十賀の試楽が暗さに絡めとられるのは、この引用部の直後に、光源氏の有名なことばがあるからである。

過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめたがたきわざなり  
けれ。衛門督心とどめてはほ笑まるる、いと心恥づかしや。  
さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。

老は、えのがれぬわざなり。

若菜下 二八〇頁

不義の自覚から光源氏との対面に怯える柏木を見据えつつ発せられるこのことばは、皮肉にも、かつての藤壺との罪を抱える光源氏じしんに、鋭くはね返ってくる。これを機に死に至る病に陥る柏木と因果応報の光源氏の罪は、華やかな場面であればあるほど、その深刻さが際だつた。しかし、それは、朱雀院の五十賀そのものを貶めることにはなるまい。むしろ、こうした法皇の威厳を表す場との拮抗のなかで、光源氏の名ぜりふが発せられてゐるとみるべきなのではないだろうか。

若菜上下巻における賀宴は盛儀を尽くしながら、六条院体制の崩壊をくつきりと描き出すのであり、この朱雀院五十賀も、その相次ぐ延引という異例の事態をとおして、光源氏体制の崩壊に関わつてゐる。しかし、延引は光源氏側の事情と連動してゐるのであり、五十賀当日の叙述に「さて、やむまじきことな

れば、いかでかは思しとどまらむ」とあるように、度重なる延引にもかかわらず、中止すらできない光源氏の苦衷が描かれている。朱雀院の存在を思うからこそ、中止にはできないのであり、これは、苦衷のなかにある光源氏に算賀を行わせしめる、朱雀院という法皇の存在を表している部分と解釈することもできるのではないだろうか。若菜下巻末の「例の五十寺の御誦経また、かのおはします御寺にも摩訶盧毘遮那の」という一文は、算賀の詳細も省略されて暗い雰囲気醸し出しているが、一方で「例の」ともあり、算賀の一環である誦経がいつもどおりに行われていることをも表す。確かに華やかな描写は欠落しているが、それは試楽の方に委ねられているともみられるのである。五十賀当日の簡略な叙述も、一概に暗いとばかりは言えない面を持っていよう。むしろ、こうした五十賀を光源氏側からとらえてゆくと、このような一文で閉じられるとみる方がよいのではないだろうか。

物語の大筋として崩壊の道筋があるにせよ、試楽の場面では、選りすぐりの舞童たちの成功を鮮やかに描き出して、法皇朱雀院が、出家してなお權威としてみなされていることを、同時に表していると考えられるのである。

## 五、物語の法皇

試楽という場を設定する朱雀院五十賀を考えてみたとき、娘ゆえの現世執着をみせる朱雀院の外側に厳然としてある、宇多

法皇にも連なる法皇としての造型をみてとることができよう。法皇の權威という前提は、朱雀院もまた備えているのである。娘に執着している出家後の朱雀院の姿は、權威として一目置かれる法皇の印象に取り囲まれるように、あるいは背後から支えるように、存在する。

物語が宇多法皇を意識しているということからすれば、そうした權威ばかりではなく、離脱後も現世に執着するという点においても、また類似する部分はいかがえよう。法皇が世俗と関わることじたいは、決して物語世界独自の虚構なのではない。宇多は、寛平九（八九七）年に三十一歳で讓位の二年後、昌泰二（八九九）年十月二十四日に仁和寺で出家して法皇となり、承平元（九三二）年に六十五歳で崩御するまでの三十年余りの日々を、法皇として過ごしたことになるが、その生活は決して隠遁者として仏道一筋に生きるというものではなかった。桐壺巻の高麗の相人のくだりで「寛平の帝の御戒めあれば」とふれられてもいるように、その讓位の際に「寛平御遺戒」を醍醐天皇に授け、影響力を持ち、一方では、その妻との交流の様子もうかがえる。<sup>23)</sup>

かくて、みかどおりさせたまひて二年といふに御髪おろさせたまひて、仁和寺といふところに住ませたまふ。時／＼后宮におはしましかよはせたまふ。宮、世に知らずかなしと見たてまつる。もと住まひたまひし所に、帝おはしまして、御とききこしめす。さぶらひし君た

ちなどめしあつめて、御おろしたまはずに、御方より言の葉に絶えせぬ露はおくらんやむかしおほゆる円居したれば

『伊勢集』二四<sup>(2)</sup>

宇多天皇の中宮温子に伊勢は仕え、これは温子からの贈歌である。詞書によれば、出家後仁和寺に住む宇多法皇が、しばしば后宮つまり温子のところに通つていたという。詞書後半部「みかどおはしまして」の「帝」を「宮」とする本文異同もあるが、歌語の使われ方や伝える内容からして、法皇がいらつしゃつてお食事をなさつた時に温子から詠みかけられたという詠歌事情は動くまい。この贈答は『後撰集』卷十五雜一にも収められ、温子の一〇九七番歌は「七条の后」の歌とあり、詞書には「法皇はじめて御髪おろしたまひて、山踏みしたまふあひだ、后をはじめたてまつりて、女御・更衣、なほ一つ印にさぶらひたまひける、三年といふになん、帝かへりおはしましたりける、昔のごと、同じ所にて御おろしたまふけるついでに」とある。『後撰集』では法皇が女御更衣一つ所に住む院に帰られた時としており、状況は異なるものの、やはり出家後も妻たちの所へ出入りしていたことに変わりはない。俗世と関わることじたいは、決して架空の設定ではない。詞書の「仁和寺」からたびたび通つてくる宇多法皇は、俗世とのかかわりという意味では、朱雀院の造型と重なる面を持つ。

しかし、俗世という点では確かに共通するものの、俗世の意

味する内容は多様であり、宇多法皇の場合は権力世界としての俗世である印象が否めないのに対し、朱雀院がこだわるのは血縁の娘への情に終始する。朱雀院は、もとより、俗世に影響を及ぼすような権力などには、まったく執着していないのである。一見、俗世という面において宇多法皇と類似するだけに、かえつて、それが、同時に、史実の宇多法皇との造型の違いを、浮かび上がらせることにもなるのである。

物語における朱雀院の描写を確認してみたい。宇多法皇の算賀を睨みあわせる『新儀式』「天皇奉賀上皇御葬事」が、「前二年」として算賀の一・二年前から準備することを記すのは先にみたとおりが、物語の五十賀に、最初から十分な周到な準備期間など設けられてはいない。十月の住吉參詣の後、朱雀院の娘との対面を望む気持ちと述べ、便りに、にわか光源氏が思いついたのである。五十賀そのものが、本来、朱雀院の娘への情を汲み上げる企画であった。

本来、物語において朱雀院の心の向く方向は、政治権力などとは無縁であった。

入道の帝は、御行ひをいみじくしたまひて、内裏の御事をも聞き入れたまはず。春秋の行幸になむ、昔思ひ出でられたまふこともまじりける。姫宮の御事をのみぞ、なほえ思し放たて、この院をば、なほおほかたの御後見に思ひきこえたまひて、内々の御心寄せあるべく奏させたまふ。

若菜下 一七六頁

法皇としての朱雀院は、政治向きの口出しなどはしない人という設定なのである。退いた立場から政治に関わるようなことは望んでいない。朱雀院の場合、史実の宇多法皇に繋がるような法皇の権威を外郭に備えながら、一方で、内面の心情においては、むしろ宇多法皇のようなあり方とは重ならない法皇として、造型されている面をみてとれよう。朱雀院の心の内にあるのは、俗世一般なのではなく、俗世に影響を及ぼす力でもなく、ただ娘ゆえの思いだけなのである。

権威という枠組みを外側に持ちながら、それに馴染まぬ心を持って物語世界を生きる人、それが朱雀法皇という人なのである。

## 六、光源氏と朱雀院

朱雀院の娘ゆえの思いが最も極まるのは、女三宮の出家場面である。朱雀院の惑う姿を描くこの場面も、悲嘆にくれる朱雀院をみるばかりではなく、その背後にある法皇としての輪郭のなかで描かれているとみるべきであろう。権威ある法皇という立場と、娘ゆえの迷妄の狭間で、揺れる朱雀院の姿が描かれているのではないだろうか。

山の帝は、めづらしき御事たひらかなりと聞こしめして、あはれにゆかしう思ほすに、かくなやみたまふよしのみあれば、いかにものしたまふべきにかと、御行ひも乱れて思しけり。さばかり弱りたまへる人の物を聞こしめさで日ご

ろ経たまへば、いと頼もしげなくなりたまひて、年ごろ見たてまつらざりしほどよりも、院のいと恋しくおぼえたまふを、「またも見たてまつらずなりぬるにや」といたう泣いたまふ。かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏させたまひければ、いとたへがたう悲しと思して、あるまじきこととは思しめしながら、夜に隠れて出でさせたまへり。

柏木巻 三〇三頁

朱雀院は、女三宮を心配するあまり、仏道修行も乱れているありさまである。衰弱した女三宮が父院を恋い慕って泣いていると伝え聞き、急遽下山する朱雀院を、物語は「山の帝」と呼ぶ。物語中に五例みえるこの呼称の二例は前にもふれたとおりだが、これらの用例のすべては朱雀院のためにある。「山」は、山にある出家者の身を表すが、下に続く「帝」は、やはりかつての帝としてあることを意味していよう。「山」だけに比重が置かれていたのではなく、同等に「帝」であることも表している。「あるまじき事」と自覚する朱雀院の行為は、出家した身に反すると同時に、出家した法皇という身に反することでもある。それこそ、娘ゆえの迷妄に他ならない。結果として女三宮を出家させるこの下山は、あくまでも闇に紛れての下山として描かれる。『河海抄』はここで「李部王記云延長八年九月廿八日申刻法皇御（加）持院奉訪上……略……」と「李部王記」の記事を引き、宇多法皇が病気の醍醐上皇を見舞い加持をしたことをあげているけれども、法皇が上皇の所へ赴くという点は似ているも



の、申の刻に重病の醍醐上皇を見舞うのとは、まったく趣が違ふ。朱雀院の場合、「帰り入らむに、道も昼ははしたなかるべしと急がせたまひて」「明けはてぬるに急ぎて出でさせたまひぬ」と繰り返されるように、その下山は人目を忍ぶ極秘の行為として強調されているのであつた。法皇という立場にあるからこそ、朱雀院は見られることを避け、大急ぎで女三宮を出家させなければならぬと判断する。権威ある法皇という立場ゆえに際だつ、迷妄なのである。

この場面の朱雀院は、狼狽する光源氏を圧倒するかのようである。朱雀院の姿は、出家もままならない光源氏の目には「御容貌異にても、なまめかしくなつかしきさまにうち忍びやつれたまひて、うるはしき法服ならず、墨染の御姿あらまほしうきよらなるも、うらやましく見たてまつりたまふ」と羨ましく映る。「厄になさせたまひてよ」と懇願する女三宮に、朱雀院は「さるべき御本意あらば、いと尊きことなるを、さすがに限らぬ命のほどにて、行く末遠き人は、かへりて事の乱れあり、世の人に譏らるるやうありぬべきことなん、なほ憚りぬべき」と翻意を促しつつ、光源氏に対しては、これまでの冷遇を恨み、鐘愛の娘を出家という最後の手段で守りぬこうとする。このよな朱雀院は、光源氏の側には、父としての私情に突き動かされるながら、法皇にふさわしい威厳をも発動する存在と映っているのではないだろうか。

出家をさせた直後の朱雀院の悲嘆は、光源氏に勝るとも劣ら

ないものであつた。

いと盛りにきよらなる御髪をそぎ棄てて、忌むこと受けたまふ作法悲しう口惜しければ、大殿はえ忍びあへたまはず、いみじう泣いたまふ。院、はた、もとより、とりわきてやむことなう、人よりもすぐれて見たてまつらむと思ししを、この世にはかひなきやうにないたてまつるも飽かず悲しければ、うちしほれたまふ。

柏木 三〇八頁

激しく泣く光源氏に対して、朱雀院はこらえつつも涙にむせんでいる。はかりしれない悲嘆を押さえながら涙をとどめられない朱雀院の姿に、弱さの涙をみるよりも、闇に紛れた極秘行為のなかで、鐘愛の娘の出家に煩悶する、高適で切ない涙をみたい。帰り際の朱雀院が言い置く「さまに従ひて、なほ思し放つまじく」のことは、光源氏はなすすべもなく、こらえかねているばかりである。

法皇朱雀院には、ただ迷妄のみが描かれているわけではない。みてきたように五十賀やその試案によつて、法皇としての権威は人物造型の外側に厳然としてあり、その内側にこうした娘ゆえの迷妄の物語が展開されているのである。法皇朱雀院の造型として、この立体的なあり方をとらえてみるべきなのではないか。それは、また光源氏のあり方ともみあつてこよう。第二部の物語世界で六条院体制の崩壊が描かれ、光源氏の上に暗雲が垂れ込めるわけだが、迷妄を生きるのは、決して光源氏ひとり

なのではない。法皇という權威の大粹のなかにありながら、ともに迷妄を生きる朱雀院がいる。物語世界の低音部にあるもうひとつの迷妄に光をあて、栄華と權威をそれぞれ背後に持つふたつの迷妄が対峙し、解決のしようもない様相を描出するのが、柏木巻の光源氏と朱雀院の対面場面ではなかったか。

若菜上下巻から柏木巻への物語展開を、体制の崩壊という暗い方向へ引きしほる見方は明解であるだけに、かえって視野から遠ざけられてしまったものもあるのではないだろうか。第二部の物語に浮上する光源氏の深刻な事情の周縁に、厳然とあるものに光をあてる時、物語世界の奥行きも、おのずと逆照射されてくるのである。

#### 注

(1) 武者小路辰子「若菜巻の賀宴」『日本文学』(一九六五・六)、のちに『源氏物語の生と死』(武蔵野書院 一九八八) 所収。

その注のなかで、「若菜下巻においてもっとも主要な紫の上重病・女三の宮の柏木密通事件は朱雀の五十賀の年に起る。前年朱雀の皇子たる今上が帝位につく年の前数年間記事がなくてばしてあるのも、この朱雀の賀の年を選びとったためかとも思う。賀宴をむこの立場たる源氏がとりしきつてその皇女の名において主催することに着々留意しながら、紫の上の重病女三宮の妊娠により延期になり、しかもくき柏木がその手もとの女二の宮のため盛大な宴をひらいて世の評判を得たのは源氏にとって実にくちおいことである。十二月の試案のおりのこと、二十五日の賀宴をもって若菜巻が終ることも賀宴が重要な働きをもっていることを見逃せない。若菜巻上の賀宴が六条院崩壊の構図をひろげだし、下巻の賀宴がしめく

くりとなつたと見えよう」と述べている。

(2) 今井源衛「女三宮の降嫁」『源氏物語の研究』(未来社 一九六二)。

(3) 坂上けい「朱雀院の役割」『国語国文』(一九六一・五)、白方勝「朱雀院の生涯―負け馬の論理とその変身」『源氏物語の探究』(風間書房 一九七四) など。

(4) 石津はるみ「若菜への出発―源氏物語への転換点」『国語と国文学』一九七四・一一)。

(5) 鈴木日出男「朱雀院と光源氏―『源氏物語』ノート」『成城国文学論集』一九八一・三)。

(6) 浅尾広良「朱雀院の出家―西山なる御寺」仁和寺准拠の意味―『大谷女子大國文』(一九九八・三)。

(7) 『源氏物語』の本文引用はすべて新編日本古典文学全集本(小学館)による。なお、表記等は私に改めた部分がある。

(8) 藤本勝義「朱雀院論―源氏物語第二部を視座として」『青山学院女子短期大学紀要』(一九八五・一一)。藤本氏は、この朱雀院の造型が宇治の八の宮に引き継がれていくとみる。

(9) 用例は次のとおりである。

【母君↓故桐壺更衣】

\*やめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立てて、めやすきほどに過ぐしたまひつる、闇にくれて臥しづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

桐壺 二七頁

\*くれれまどふ心の闇もたへがたき片はしをだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかてたまへ。

桐壺 三〇頁

\*これもわりなき心の闇にむむ。

桐壺 三二頁

【明石御方↓明石姫君】

\*狩の御衣にやつれたまへりしだに、世に知らぬ心地せしを、まして、

さる御心してひきつくるひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまはゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。

松風 四〇九頁

\*よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推しはかりたまふにいと心苦しければ、うち返しのためひ明かす。

薄雲 四三三頁

【左大臣↓故奏上】

\*八月廿廿日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに、大臣の闇にくれまどひたまへるさまを見たまふもことわりにいみじければ…略…

葵 四八頁

【藤壺・光源氏↓若君】(王命婦詠)

\*見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人のまどふてふ闇

紅葉賀 三二七頁

【光源氏↓若君 (冷泉) Ⅱ藤壺】

\*尽きもせぬ心の闇にくるるかな雲居に人を見るにつけても

紅葉賀 三四八頁

【光源氏↓夕霧】

\*大殿の若君の御事などあるにも、いと悲しけれど、おのづからあひ見てん、頼もしき人々ものしたまへばうしろめたうはあらずと思しなざるは、なかなかこの道のまどはれぬにやあらむ。

須磨 一九三頁

\*ただ今はきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや。

野分 二七五頁

(10) 該当する用例は注(9)の須磨巻の例と次の例である。

【光源氏↓春宮 (冷泉)】

\*月のすむ雲居をかけてしたふともこのよの闇になほやまどはむ

賢木 一三三頁

【父大臣↓故柏木】

\*大臣などの心を乱りたまふさま見聞きはべるにつけても、親子の道

の闇をばさるものにて、かかる御仲らひの、深く思ひとどめたまひけむほどを推しはかりきこえさするに、いと尽きせずなむ…略…

柏木 三三九頁

【八宮↓子 (一般)】

\*子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を乱さずやあらむ。

稚本 一八〇頁

(11) 引用した以外の全用例は、次のとおりである。

【明石入道↓明石御方】

\*心の闇はいとまどひぬべくはべれば、境までだに…略…

明石 二六九頁

\*などかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらんと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに…略…

松風 四〇五頁

【大宮↓夕霧・雲居雁】

\*ものげなきほどを、心の闇にまどひて、急ぎものせんとは思ひよらぬことになん。

少女 四三頁

【明石入道↓子孫】

\*世を捨てて明石の浦にすむ人も心の闇ははるけしもせじ

若菜上 一〇八頁

【雲居雁↓藏人少将】

\*いとかたはらいたきことにつけて、ほのめかし聞こゆるも、世にたたくなしき闇のまどひになむ。

竹河 八二頁

【夕霧↓六の君】

\*げに、親にては、心もまどはしたまひつべかりけり。

宿木 四二〇頁

【今上帝↓女二宮】(薫の会話)

帝と聞こゆれど、心の闇は同じことなんおはしましける。

宿木 四七七頁

【中將↓浮舟】(薫の手紙)

宿木 四七七頁

あさましきことは、まづ聞こえむと思ひたまへしを、心ものどまらず、目もくらき心地して、まいていかなる闇にかまどはれたまふらん、そのほどを過ぐしつるに、はかなくて日ごろも経にけることをなん。

蜻蛉 二三八頁

(12) 注(8) 藤本論文参照。

(13) 村上美紀「平安時代の算賀」「寧楽史苑」(一九九・二)。

(14) 注(6) 浅尾論文は、史実の上皇たちの場合、不例による出家から崩御までの時間は極端に短いと指摘する。

(15) 注(13) 村上論文参照。村上氏は、「日本紀略」延喜十六年三月三日条「太上法皇可有三十御賀、於左近衛府序、試同御賀重等」、三月五日条「天皇：略：又、御仁仁壽殿、贈太政大臣藤原公第三男奏、散手舞」とあり、試楽とは表記しないものの内容的には後世の史料に表れてくる試楽とはほぼ同じものとみられること、また、『河海抄』が引く『御記』に「延喜十六年三月、御賀試楽、中務卿親王、太宰帥親王、在階下唱歌、侍臣五六人又唱歌」とあり、ここで「試楽」の語を用いていることをあげる。「河海抄」の記述は玉鬘の奉る光源氏四十賀の場面であり、また『河海抄』の時代の解釈の反映という面もあるが、「試楽」とみなせる記述が『日本紀略』にあり、『御記』にあることは注目できる。

(16) 石田稷「朱雀院のことと准拠のこと―源氏物語の世界―」「源氏物語論集」(桜楓社 一九七)。

(17) 縄野邦雄「源氏物語」第一部の朱雀院について―宇多院の准拠を手がかりに―『中古文学』(一九九六・五)、注(6) 浅尾論文など。

(18) 注(13) 村上論文参照。舞踏の時の袖の扱いが間違っていたという(『西宮記』卷八「致敬礼」)。また醍醐天皇四十賀では、親王献酒舞の違いを指摘しているという(『西宮記』卷八「依新定酒式王御飲罰酒事」)。

(19) 服藤早苗「舞う童たちの登場 王権と童」「王朝の権力と表象―学芸の文化史」(森話社 一九九八)。

(20) 注(19) 服藤論文参照。

(21) 小山香織「源氏物語」における子ども存在―朱雀院五十賀の舞童をめぐって―『国文目白』(一九九九・二)。

(22) 「陵王」については、拙稿「源氏物語」と陵王―引用の彼方にあるもの―『論叢源氏物語』3 引用と想像力(新典社 二〇〇二)をあわせてご参照いただければ幸いである。なお、現行の舞楽では、「納曾利」は一人舞(南都では一人舞)、「落躰」は一人舞(南都では二人舞)である。

(23) 以下は、拙稿「法体の朱雀院」(後藤祥子編「源氏物語の鑑賞と基礎基礎知識」柏木(至文堂 二〇〇一・二)所収)を再考した。旧稿および関連部分の鑑賞部分と一部重複することをお断りする。

(24) 『伊勢集』の引用は『国歌大観』により、表記は適宜私に改めた部分がある。

(25) 該当場面と前述の若菜下巻と横笛巻以外の用例は次のとおりである。

\*これは、ただ忍びての御念誦堂のはじめと思したることなれど、内裏にも、山の帝も聞こしめして、みな御使どもあり。

\*山の帝も聞こしめして、いとあはれに御文書いたまへり。

鈴虫 三七八頁  
夕霧 四三九頁

(26) 『河海抄』の引用は玉上珠彌編「紫明抄・河海抄」(角川書店 一九六八)による。